

ルカ 2 章は、主イエス・キリストの誕生の物語を語っています。主イエスはまだ生まれたばかりの赤ちゃんです。赤ちゃんは、お母さんに抱かれ、おっぱいを飲んでいるか、寝ているか、泣いているかです。それ以外には何もできません。そのような赤ちゃんである主イエスと出会った人々のこと、そのことによって彼らに起ったことが本日の箇所にも語られています。その人々は二人の老人です。一人はシメオン、もう一人はアンナといいます。先ず 3 6 節以下のアンナのことを紹介しますと、女預言者で、若いときに嫁いで七年間夫と共に暮らし、夫に死に別れて今は八十四歳になっていました。エルサレムの神殿から離れず、断食したり祈ったりしながら、夜も昼も神に仕えていたのです。この人が、両親に連れられてエルサレム神殿に来た赤ちゃんの主イエスを見て、神様を賛美し、人々にこの幼子のことを話して聞かせたのです。

もう一人はシメオンという男性です。2 5 節以下にその人のことが語られています。この人は、「聖霊が彼の上にとどまっておられた。」とあり、「主のキリストを見るまでは、決して死なないと、聖霊のお告げを受けていた。」というお告げを受けていました。主のキリストというのは、神様が約束して下さっている救い主のことです。救い主に会うまでは死ぬことはない、救い主が現れるまで生き残る、という約束を聖霊によって与えられていたのです。この人が、エルサレム神殿に来た赤ちゃん主イエスを見て、腕に抱いて神様をほめたたえる賛美を歌ったのです。アンナとシメオンのしたことは共通しています。赤ちゃんである主イエスと出会って、神様に感謝し、ほめたたえたのです。

ところで、シメオンが老人だったとは聖書のどこにも書かれていません。アンナは八十四歳だったとはっきり書いてありますが、シメオンについては年齢も、また「年寄りだった」とも書かれていません。彼が「救い主に会うまでは決して死なない」というお告げを受けており、そして主イエスと出会って「今こそあなたは、あなたのしもべを、みことばどおり、安らかに去らせてくださいます。」と言った、それは「これでもう思い残すことは無く、安心して死ぬことができる」という意味に取ることができるので、この人は相当の年を取っていたと想像されているだけです。子供ではないにしても、もっと若い年齢の人だったということもあり得るのです。つまりこれは必ずしも老人の話ではないのです。シメオンの言葉は、「もう思い残すことはない、これで安心して死んでいける」と理解できますが、それは決して、高齢の人が、近づいて来る死を平安の内に受け入れることができるようになった、という言葉ではないのです。年齢に限らず、このように語る所がこそ、本当に幸せな、充実した人生がある、という言葉なのです。それは一つには、私たちは自分が何時死ぬのかを知らないからです。

しかしこの言葉が大事なものは、人間いつ死ぬか分からないのだから、というだけのことではありません。この言葉は、どのような思いを抱いて死ぬかというよりもむしろ、どのような思いを抱いて生きているか、を語っている言葉です。「今こそあなたは、あなたのしもべを、みことばどおり、安らかに去らせてくださいます。」とは、「私はそのように言うことができる安らかさを、平安を、満足を得ました。その安らかさの中を生きています」ということです。ですから、死ぬ間際のことばというよりも、このような安らかな思いを抱いて生きることができるようになった、そこにこそ、本当に充実した、幸福な人生があるということです。平たく言えば、私はいつ召されても大丈夫という気持ちを持って今を生きているということです。

しかしシメオンもアンナも、この時、満足できる幸福な生活を送っていたからこのように語ったり、神様を賛美することができたのではありません。シメオンは、「イスラエルの慰められることを待ち望んで

いた」と25節にあります。慰めを待ち望みつつ生きていたのです。それは、慰めをまだ見出していない、まだ慰めを得ていない、ということです。言い換えれば、それまでは慰めのない状態の中で歩み続けなければならないということです。シメオンがこのお告げを受けてから何年が経っていたのか、分かりませんが、いずれにしてもそれはつらい、苦しい歳月だったことと思います。何時与えられるのか分からない慰めを待ち続けるには、忍耐が必要です。またアンナも、若くして夫に先立たれ、八十四になるまで生きてきたその歩みにおいて常に、神様の慰めを、救いを願い求め、待ち望んできたのでしょう。断食や祈りによって夜も昼も神様に仕えている彼女は、神様による救いと慰めを忍耐しつつ待ち望んでいたのです。シメオンもアンナも、慰めと救いが無い状態の中で、長くそれを待ち望みつつ、忍耐しつつ生きてきたのです。その慰めが、救いがようやく与えられた時に、アンナは神を賛美してそのことを人々に伝え、シメオンは「主よ、今こそあなたは、み言葉どおり、このしもべを安らかに去らせてくださいます」と喜びをもって歌ったのです。

慰めと救いが無い中で、それを待ち望みつつ生きているのは私たちも同じではないでしょうか。私たち一人一人の人生に、いろいろな苦しみや悲しみや不安があります。私たちはその中で慰めと救いを求めています。慰めと救いとは本当に神様が生きて働いておられることを私の人生を通して体験することとも言えるでしょう。しかし本当の慰めと救いはなかなか見出すことができません。慰めと救いが見出せない中を、それを待ち望みつつ忍耐しているのが私たちの人生だと言えるでしょう。一人一人の個人的な生活がそうであるだけではありません。今の時代はかつて国と国、地域と地域が共通の価値観や配慮をもっていただろうが、他人は他人、関心があるのは自分のことだけといった風潮の中にあることを覚えます。要するに、誰も、何も信じられなくなった、あるいは信じ難いという状況だということです。世界全体が、不安と疑心暗鬼に捕えられている。まさに慰めと救いのない状況の中で、本当に信頼できるもの、頼りになるものを探し求めつつ、それを見出せずにいるのではないのでしょうか。社会全体がこのようなパニックに陥っている中で、私たちは今日、聖書のこの箇所を与えられ、「主よ、今こそあなたは、あなたのしもべを、みことばどおり、安らかに去らせてくださいます。」という言葉聞いています。これこそ、私たちが心の底から聞きたい、また語りたく願っている言葉なのではないのでしょうか。

シメオンがここで語っている安らかさ、平安、慰めは、自分や他人のことを、つまり人間のことのみを見つめていたら得られません。それは私たちが自分の力で、人との関係の中で獲得するものではなくて、神様が与えて下さるものです。神様と自分との間に「あなたと私」という関係が与えられ、その神様によって、安らかさ、平安、慰めが与えられるのです。シメオンはその神様のみ業を見ました。30節に「私の目があなたの御救いを見たからです。」とあります。シメオンは神様の救いを見たのです。彼はいったい何を見たのでしょうか。それは両親に抱かれてエルサレムの神殿にやって来た赤ちゃんのイエスでした。この赤ん坊を見たことによって、シメオンは、「私の目があなたの御救いを見たからです。」と言ったのです。アンナも同じです。彼女も、両親に抱かれている赤ん坊であるイエスを見て、神を賛美し、「エルサレムの贖いを待ち望んでいるすべての人々に、この幼子のことを語った。」、つまり、この幼子こそ私たちが待ち望んでいる救いをもたらす方、メシアだと語ったのです。

彼らは、赤ちゃんである主イエスを見て、どうしてこのように語ることができたのでしょうか。この赤ん坊こそイスラエルに慰めと救いをもたらすメシアだとどうして分かったのでしょうか。それは根本的には聖霊の示しによって、としか言いようがありません。赤ちゃんイエスのお姿の中に何かそれらしい印があった、ということではないのです。彼らが赤ちゃんイエスを見てこのように語ったことはそれ自

体が一つの奇跡、神様の不思議なみ業です。しかし彼らの中にも救い主に会うための備えがあった点も見逃せません。シメオンは「敬虔な人で待ち望んでいた」とあります。また「主のキリストを見るまでは、決して死なない」とも聞いていました。だからこそ彼はいつも期待を持って何度も神殿に足を運んだことと思います。神がいるか、いないか分からない、あるいはいないと思いながら人生を力強く歩むことは難しいと思います。いつもそこには虚しさがやってくるからです。神が信じられていない世界においては物事の意味は問われません。すべては偶然ですから。そうですよね。自分のやっていることや経験したことに意味があると思えるのはそこに意味を与えてくださる方が必ずいるからだと信じているからですよね。自分で自分に「これは必ず意味があるんだ。無駄には終わらない」と言い聞かせてもやっぱり独り言となってしまいます。増して他人があれこれ言っても何の責任を取るわけではないので空しいと思います。シメオンは幾度となく神殿に足を運んだでしょうし、無駄と思えるような経験も数多くしたことと思います。しかし、必ず救い主を見る、神の御業を拝する時が来ることを知っていましたから最終的には全てのことが意味を持つことになったのです。

アンナはどうでしょうか？ 彼女もまた「宮を離れず、夜も昼も、断食と祈りをもって神に仕えていた」というのです。アンナもまた、救い主に会う希望をもって日夜信仰生活に励んでいたのです。救い主に会う準備を日々行っていたのです。シメオンにしても、アンナにしてもそのような待ち望む時を経て、ついに主イエスに合い見えたときの喜びはどんなに表現しようのないほどの大きなものだったのでしょうか。

わたしたちにとって、この一事が満たされれば人生のすべての意味や目的は達せられる、というものがあるのでしょうか。それさえあればもう何もいらぬ、と言えぬものをわたしたちは持っているのでしょうか。シメオンにとってそれは、救い主と相まみえることにほかならなかったのです。

さらにここには救い主に会うということが新たな試練に出会うことにもなると言われています。このメシア（救い主）は「反対を受けるしるし」ともなると言われています。このお方を救い主として受け入れるのか、それとも拒絶するのかによって、この「救い」はまた「つまずき」、「妨げ」ともなり得るのです。この救い主は「イスラエルの多くの人を倒したり立ち上がらせたりする」というのです。このキリストに対する態度表明を通じて「多くの人々の心の思いが現れるためです。」（35節）とも言われています。わたしたちもまた、シメオンやアンナと一緒に、救い主の到来を喜ぶ礼拝の輪に加わるのか、それとも主イエスを「反対を受けるしるし」としてしまうのかを問われています。真実を告げ知らせる聖霊の導きに心の支配を明け渡すよう求められているのです。

人間が苦難や試練の只中で真の慰めを経験するのは、天からの慰めに包まれる時です。それはただ悲しむ者を力づけようとする人間の言葉ではなく、また単なる気休めの言葉でもありません。罪の赦しと永遠の命、神の国と結びついた慰めです。神との和解と結びついた慰めです。この慰めこそが、真実に人間を癒し、全き安息のうちに主が備えたもう道を歩む人生へとわたしたちを導くのです。神様との関係において平安を与えられてこそ、初めてわたしたちは「いつ召されても大丈夫」と告白できるのです。天来の慰めこそが人を真実に慰め、悲しみと試みの中にあっても人を支えるのです。本当の平安は神様からしか来ません。主イエスにあって真実な安らかさを生きたいものです。